

佳作

『これはペンです』 円城塔著

文学部 文学科1年 馬場大貴

「This is a pen」。わかっています、先生。見れば分かるようなこと、日常会話の中では全く使うことがない例文。覚える意味が分からないと思ったことは沢山ある。しかし、それらの例文に意味があるか、とは考えたこともなかった。

作中には姪である「わたし」とその「叔父」が登場する。「叔父」は機械で論文を生成する技術を生み出した。それは全く内容の通らない論文で、専門用語の切り貼りに簡単な文法を組み合わせたものだった。しかし、その論文は人々に認められる。なぜなら誰にも理解できないものは未知の存在として認めざるを得ないからだ。そして、「わたし」はそうして作られた文章の意味と、顔も分からず手紙でしか交流できない「叔父」の所在を求めていく。

文字とは何か。この作品はその根本的な問いを提示する。例えば、この書評を書いているのは僕だが、僕が書いていないともいえる。あなたが読んでるのは僕が書いた文章ではなく、あなたが想像し創造する僕が書いた文章である。それは書き手が僕でなくても問題はないことになる。なぜなら文字はトートロジーのように文字でしかなく、その証拠を持ち合わせていないからだ。しかし、僕がこの文章を書いたことは、この書評の初めに僕の名前があることで推測される。それはただの文字の配置の問題であるにも拘らずに。

世界中で利用される SNS ではどうだろうか。制限文字数 140 文字の中で気持ちを述べることできる Twitter、気軽に相手と会話のできる LINEなどを多くの人々が所かまわず利用している。それは人々の距離を縮めることになり、新しい友好関係や争いを生んでいる。しかし、「そもそも文章の意味はなにか」と考えているだろうか。文章の巧拙を問題にしたいのではなく、文字の連なりにその文字通りに意味が存在するのか、ということだ。極端な例を挙げれば、相手はプログラムを変えキーボードの A だけを押して文章を書いたのかもしれない。そうした場合はたしてそこにどんな意味があるのか。

この作品は、文章の虚構性を皮肉に描き、当たり前に触れている文字の本質を問うものとなっている。豊富な科学的知識を用いて物語に強い現実感や新奇性を生み、その一方では、文字について文字で書くというメタフィクションが幻視体験に似た感覚を与え、夢の中の夢、結末のない文字のルーティンへと僕たちを誘う。

文章を読むのは僕たち自身でありコンピュータではない。新たに生み出される文章、それらすべての意味は僕たちがすでに手にしている。この果てしない自由を気づかせてくれた。